ひょうたん島日記

絆を深めた吹奏楽合同演奏会
～大槌中が秋田・山王中と～

中学校吹奏楽の名門・秋田市立山王中吹奏楽団と、大槌中吹奏楽団との合同演奏会が 4 月 29 日（月）、城山公園体育館で開かれました。両校が心を合わせて奏でた曲を、約 200 人の聴衆が聴き入りました。

山王中は 30 回を超える全国大会への出場回数を誇り、全国大会で金賞を 15 回受賞しています。山王中と大槌中は、震災直後の 2011 年 5 月に岩手県花巻市で開かれたチャリティーコンサートに参加したことが縁で、つながりができ、山王中吹奏楽団顧問の木内恒さん（53）が大槌中で指導する仲になりました。

山王中が大槌町を訪ねて演奏するのは初めてで、山王中と大槌中との合同演奏会は「絆コンサート」として企画されました。山王中からは 2、3 年生 57 人、大槌中からは 24 人が参加しました。

第 1 部が大槌中、第 2 部が山王中、第 3 部が合同での演奏が繰り広げられました。大槌中は、「上を向いて歩こう」「ひょっこりひょうたん島」を、山王中は、「COSMOS」「ディスコ・キッド」を演奏。合同のステージでは、「エルザの大聖堂への行列」「星条旗よ永遠なれ」を演奏し、聴衆からの「アンコール」には、「ヤングマン」で応えました。

山王中顧問の木内さんは「太平洋と日本海の反対側に位置した両校が一緒になって、演奏できてうれしい」と話し、大槌中の顧問の伊藤英利子さん（36）は「山王中の生徒さん一人一人が自分で音を表現しようする姿勢に学ばせてもらいました」と語りました。

演奏会が終わると、大槌中 3 年の部長の岩間文佳さん（14）が「今回のステージを糧としてがんばりたい」とあいさつしました。両校が東北大会、全国大会で再会できるといいですね。

小泉進次郎氏が大槌へ
～水産加工場などを視察～

自民党衆院議員で党青年局長の小泉進次郎氏が 5 月 11 日（土）、大槌町を訪れ、水産加工場を視察し、若者と対話し、町から復興に向けての要望書を受け取りました。これまでも何回か訪れているために顔見知りの町民も多く、周囲に笑顔で応えていました。

小泉氏は、自民党青年局の「チーム・イレブン」のメンバーとして来町しました。「チーム・イレブン」は復興を支援するために昨年 2 月に結成され、毎月、11 日の月命日に、各地の復興の現場に足を運んでいます。

小泉氏を中心とする一行は、この日の午後、小枕の水産加工場を訪れ、「ど真ん中・おおつち協同組合」のメンバーから説明を受けました。その後、「おらが大槌復興食堂」で、町内の若者と意見交換しました。大槌高校の高校生や、新おおつち漁協、岩手県看護連盟などから約 30 人の若者が参加。「若者が町に残ることが出来るよう雇用の場を確保してほしい」「大学で学んだことを生かせる職場を作ってほしい」・・・。小泉氏は様々な切実な声に耳を傾けながら、復興に向けての支援を約束しました。

小泉氏と町役場幹部らとの意見交換会では、碇川豊町長が、「三枚堂大ケ口地区横断道路」（仮称）の構想を盛り込んだ要望書を手渡しました。

町は大槌川と小鎚川の河口に街並みが広がっていました。震災では、その中心市街地が壊滅的な打撃を受け、大槌川流域と小鎚川流域が分断されました。横断道路構想では、小鎚川沿いの三枚堂地区と、大槌川沿いの大ケ口地区とを結ぶ道路を整備します。災害時には、「命の道」の緊急道路として利用され、平時には、地域交流を促進し、産業の活性化を図る役割が期待されています。

豊漁に沸く魚市場
～震災後初の春網漁～

「春網」と呼ばれる定置網漁の豊漁で、大槌町の魚市場が沸きました。震災後、初の春網漁で、カラフトマスやスケトウダラの水揚げ量が記録的な数字を示しました。秋サケ定置網漁が低調だっただけに、関係者は明るい表情でした。

春網漁は 4 月 25 日（木）から始まりました。春網漁は秋サケ漁に比べると採算がとれず、震災前から休漁する状態が続いていました。復活初日の水揚げ量は、カラフトマス 69 キログラム、スケトウダラ 13 キログラムでしたが、3 日目の 27 日に、それぞれ 21 トン、11 トンと、はねあがり、4 日目の 30 日も、7 トン、16 トンでした。仲買人で中里魚店の中里正義さん（67）は「かつて経験したことのない豊漁。20 年ぶりぐらいかな」と言っています。マスとタラを合わせた 25 日から 27 日までの 3 日間の水揚高は、400 万円を超えました。

新おおつち漁業協同組合の定置網船「久美愛丸」が 30 日朝、沖野島漁場での漁を終え、大槌漁港に戻ってきました。船倉でひしめき合っていたマスやタラは、銀鱗を光らせながら、次々と水揚げされました。

新おおつち漁業協同組合で漁を指揮する大謀の小石道夫さん（61）は「水温が低く、豊漁につながっているのかもしれない。来季の秋サケ漁につながってほしい」と願っていました。

5 月に入ってからも春網は豊漁が続き、4 月末から解禁されたウニ漁も順調です。浜は久しぶりに活気にあふれています。

ふるさと大槌の記憶を求めて
～町並みの復元模型を展示～

失われたふるさと大槌の記憶をたどる「記憶の街ワークショップ in 大槌町」が、大槌町内で開かれました。白い模型により復元された震災前の町並みは、住んでいた人たちの記憶や思い出によって手直し、色付けされ、次第に、かつてのにぎわいを取り戻していきました。

この催しは、神戸大学大学院の槻橋修研究室などによる『『失われた街』模型復元プロジェクト」が主催しました。発泡スチロールなどを使い、大槌町町方地区の町並みが、縮尺 1/500 の模型で再現されました。高さ 50 センチメートルの台に乗った模型の大きさは 3 メートル四方。震災前に撮影された航空写真や、地図などを活用して制作されました。

震災前に住んでいた人たちが、それぞれの土地に、それぞれの思い出を書くことが出来るよう、5 色ののぼりが用意されました。

「大槌で一番早く咲く桜」「子どものとき山で遊んだ」「車 1 台だけ堤防の上を走れる」「昔かくれんぼをした」「アルバムが見つかった」・・・。住んでいた人たちは模型を見ながら記憶をたどり、のぼりに思い出した出来事を書いて、関連した場所にそののぼりを立てました。

「屋根の形が違う」「屋根の色はこんな色」「ここには大きな木があった」。かつてのにぎわいを見せていた町並みが、次第に姿を現してきていました。

大槌町小鎚の藤原富美子さん（56）は、幼い時に住んでいた本町の家が津波で流されました。藤原さんは、展示された模型を見て懐かしげです。「細かに再現されています。幼い時のことを思い出します」

主催している神戸大大学院の阪本昌則さん（23）は「失われた町の風景には町民それぞれの大事な記憶が宿っています。記憶を再現し、模型とともに後世に残したい」と話しています。